

### 三高と私（99・9・11）

梅 棹 忠 夫（昭16・理甲）

はじめに

梅棹先生は一九八六年三月、六五才のときに失明されました。十年ほど前、私共昭和15年卒業組の「卒業後五〇年」の会の時、三高会館で一度お話をして欲しいと申しましたら「私はもうあかん。メモを書いても見るわけにもいかんし、人の前で話をするようなことはできん」というような弱音を吐かれました。このたび、私（井垣隆敏）が順次お尋ねするような進め方で、お話をして頂くことになりました。みなさまにはこの日のために作成しました資料（別掲）をお配りいたします。

元号は不要である

皆様にお配りしたレジメには著作歴を西暦で書きました。梅棹先生はいろいろなで

きごとを、西暦の年数できちつと覚えておられます。私は西暦というのは不得手でした。ところがご自身の生れ年が丁度二〇年ということで、二〇を引けばお年が出ます。昭和の年数は二五を引けばよいということで、私もこの表を作りまして初めて慣れました。なぜ西暦が合理的なのか、ご意見をお聞かせ下さい。

西暦しか使わないと言うと、日本人としてはきざな感じがしなくてもありませんが、私の頭の中には自分の過去の経歴が全部西暦ではいつているのです。というのは、後半生、成人してから後の殆どが海外の仕事です。日本にいても、日本のことにあまり興味が無かったので、新聞も政治面、経済面は読んでいません。こんなことを言うとおかしいのですが、また、馬鹿だと思われるかもしれませんが、六〇年安保、七〇年安保のどちらも記憶がありません。そんなことに興味が無かったのです。大体ずつと断続的に海外で仕事をして来ました。そうしますと、これは昭和暦ではどうにもなりません。だから記憶が全部西暦で入っているのです。

元号というのは一体何ですか。これは私は全く知らないものだと思うのです。何処かを起点にして順番に年を数えていくのが一番合理的です。元号というものは、もちろん日本の発明ではありません。中国の真似です。中国はやくに一世一元になりましたが、日本が一世一元になったのは明治からです。孝明天皇のときまでは、天皇一代について幾つも

# 「三高と私」

梅棹忠夫氏（S16理甲）レクチャー資料

——1999年9月11日（土）・於「三高会館」——

まえおき

| 年月    | ポイント      | M E M O (*印 … 学術探険)       |
|-------|-----------|---------------------------|
| 20. 6 | (出生)      | 京都市・西陣の商家                 |
|       | (小)       | 昆虫好き                      |
|       | (中)       | 京都一中                      |
| 36. 4 | 三高理科甲類入学  | 博物同好会*山城30山「登山あんない(下巻)」執筆 |
| 41. 4 | 京都大学理学部入学 | 4修・2学年3回*白頭山、樺太「犬樞り」      |
| 43.10 | 同大学院へ     | 動物学科専攻*ミクロネシア・ポナペ島、大興安嶺   |
| 44. 5 | 張家口へ      | (戦車兵)、内蒙古自治区「西北研究所」       |
| 45. 8 | (終戦)      | 天津へ脱出                     |
| 46. 5 | (帰国)      |                           |

## 著 作 歴

| 年月    | ポイント        | 著 書 名    | M E M O                      |
|-------|-------------|----------|------------------------------|
| 57    | *東南アジア4ヶ国   | 文明の生態史観  | 比較文明論                        |
| 61    | 理学博士号取得     |          | 動物数理社会学・オタマジャクシ              |
| 63    |             | 情報産業論    | 情報化社会の到来予測                   |
| 65    |             | 狩猟と遊牧の世界 | 起源について独創的な見解                 |
| 69    |             | 知的生産の技術  | 文章の書き方、読書術、スクラップ法ほか          |
| 70    | 日本万博        |          | 民族学博物館づくり、展示学始め              |
| 74    | 国立民族学博物館長   |          | (任期：当分)、国家公務員                |
|       |             |          | 財団法人民族学振興会千里事務局、<br>→千里文化財団  |
| 76    | 谷口国際シンポジウム  |          | 96年に第20回を開催                  |
| 77    | 民族学博物館 開館   |          | 11月15日                       |
| 81    | 大阪21世紀協会    |          |                              |
| 83    |             | 同人雑誌：千里眼 | 随筆連載                         |
| 86. 3 | 発病・失明       | 夜はまだ明けぬか | 口述筆記                         |
| .10   | 退院〈以後〉      | 「筆債」くずし  | 口述ワープロうち                     |
| 89    |             | 梅棹忠夫著作集  | 項目数220、春から編集、10月刊行開始         |
| 91    | 文化功労者の顕彰をうく |          |                              |
| 93. 3 | 民博館長 退官     |          | 退官後は顧問                       |
| 93. 6 |             | 梅棹忠夫著作集  | (完結) 全22巻、1年後に別巻<br>「年譜・総索引」 |
| 94    | 文化勲章 受章     |          |                              |

## 余 談

1. 大阪21世紀協会グランドデザインへの見直し。(92. 3) 新グランドデザイン策定。商工業都市から文化立都へ。「私の提案」〈18世紀初期の山片播桃「懷徳堂」〉
2. 「梅棹」姓のいわれ。(4代目当主)(酒飲み)
3. この頃の毎日(生活パターン)

年号が變つています。一世一元という慣習は何處から出てきたかという、中国の明の洪武帝からです。明の洪武帝が洪武、その次の永樂帝のときは永樂になります。それは元号と一致しています。それが清朝に伝えられて、清朝は全国を統一してから、康熙、雍正、乾隆となるのです。皇帝の諡が年号と同じになっています。一八六八年明治元年、その時には大清帝国は隆々と榮えていた先進国でした。日本で元号を決めるときに大清帝国の真似をしておれば問題なからうということがあったのではないですか。日本の一世一元はそこから始まるのです。

もともと、その前に一八世紀に既に日本人のなかで、一世一元がいいという議論がありました。しかし、実際は行われていません。明治になってようやく一世一元になって今日に至っているのです。西暦というのはキリスト誕生をもつて最初にする。これも我々にとつてどれだけの意味があるのか、ちよつと計りかねる点があります。その点、中国は先進国です。一九四九年、中国革命が成功したときから、さつさと西暦に切替えているのです。過去にさかのぼって中国の歴史は全部西暦になっていきます。西暦と言わないところが面白い。西暦と言わずに、彼等はこれを「公元」と称しています。公元何年というのです。これは非常に合理的な考え方で、私はそれでいいと思っています。

ほかに独自の元号を持っている国は幾つかあります。元号を持っても、どれも實際

には使っていないのです。お釈迦様の誕生日による仏暦があります、仏教の紀元で仏紀といいますが誰も使わない。それから成紀<sup>せいき</sup>というのがある、これはジンスカン紀元です。モンゴルはそれをしばらく使っていました。今はどうでしょうか。今は多分西暦になっていると思います。そういう例はほかにもあります。しかしそういうリージョナルな、或はもっとはつきり言えばローカルな元号を唱えてみても甲斐ないことで、話がややこしくなるだけなのです。大変申し訳ございませんが、ここでも私は西暦でやらせて頂きます。

### 三高生活は山行生活

梅棹先生は一九二〇年六月、京都市の西陣の商家、梅棹家のご長男としてお生れになりました。正親<sup>せいしん</sup>小学校五年修了で京都一中にお進みになり、四修で三高に入学されました。そのあたりから、どうぞ宜しく願いました。

一九三六年、三高理科甲類入学、ご紹介の通り二〇年六月生れですから、一五才一〇か月でした。ちょっと若かったのです。私の家は京都にあったのですが、寮生活を体験したと思うと寮にしばらくはいりました。南寮二番、室長は板倉又左右衛門、後に板倉創造と改名し、ずっと日本道路公団の理事として活躍した人です。その室長に「君はここへくるのが早過ぎる。もっとゆっくりせよ」と言われました。それでその通り実行しまして、

三六年から四一年まで五年間、三高にいました。板倉さんの仰せの通りの道を歩んだわけです。

三六年に入学しまして二年生には無事に進級はしたのです。ところがそこから上に上がれないで二年生を三べんやりました。同じ学年を三べんやることはないというのが旧制高校の全国共通の規約だったようです。それで二度続けて落第しますと、その当時は除名という言葉を使っていました、放り出されるのです。私も除名を申し渡されました。ところが私は自分の不行跡は棚上げにして、ものすごく腹が立ちました。一度も個人的に話をしたことがないのに、一片の答案用紙の結果だけで一人の人間を断罪しようとしている先生方に対して、何たることぞけしからんと、私は本当に腹を立てました。

私がおこったって仕方がないのですけれど、このとき奇跡が起りました。同級生及び上級生、それから当時京大に沢山いました山岳部の先輩、その人達が救出運動に立ち上がってくれたのです。各教授のところを戸別訪問、波状攻撃をかけて、私の復活を嘆願してくれました。山岳部は伝統的にキャプテンという言葉を使わないで、プレジデントと言っていました。私は二年生でありながら、山岳部のプレジデントをやっていました。それである先生のところへ行つてそのことを言うと、先生が「なぜそれを一番に言わんか」と言われたそうです。部の活動のリーダーになっていることは、当時はそれぐらい高く評価され

ていたのです。それで、先生方の間でも同情票といいますが、堪忍してやれということだったようです。一学期間だけ猶予をするということで三高に残してもらいました。一学期だけです。一学期末にそこその成績が取れていなかったら、執行猶予の身分ですから今度にはほんとうに追放になります。

それまで、私は毎週山へ行っていました。それでは落第もします。土曜のお昼過ぎから汽車に乗って、少なくとも本曾ぐらいまでは行けます。日曜登山で、比良はもちろんのこと、美濃あたりまで足を伸して、かなり広範囲に歩けるのです。

山岳部のルームの壁に大きな方眼紙が貼ってありまして、各人が自分の登山日数をそこへグラフにして書込んでいくのです。私は毎年そのトップでして、年間大体一〇〇日ちかく山へ行っていたと思います。一〇〇日行こうと思うと、ちょっと頑張らないと行けません。土曜日から行って日曜フルに使って月曜日の朝、授業が始まるまでに教室に入っていればいいので、そうすると三日になります。そうして日数を稼いだのです。それでも一〇〇日は相当きついです。それだけ山へ行っていればもちろん欠席も多くなりますし、試験もすべて「一夜漬」でした。これでは成績が良からうはずがない。それで落第させられたのです。

とにかく一学期間だけ勘弁してもらったのですから仕様がありません。山行きをいった

ん止めまして、出席しているぞということを見せなければならぬので、大教室での授業の場合は一番前の席に座って講義を聴きました。それまでは少しも講義を聴いていなかったのですから、落ちるのは当たり前です。変な言い方ですが、高等学校の講義ぐらい聴いていれば分ります、何でもありません。こんなことでずいぶん損をしたと思って、いちおう講義を聴きました。多分その一学期の成績はかなり優秀だったと私は自分で思っています。それで難なく退学は取消になったというより何にもなかった。言渡しも何にもない。自然にすうーとそのまま復帰しました。復帰と言いますが、その話はどこかへ吹っ飛んでしまったような感じで元へ戻ったのです。私はそれまでに小学校と中学校をそれぞれ一年ずつ短縮してきていたのですが、三高でその貯金を使い果たしてしまったのです。

山岳部の部屋、これは伝統的にボックスとはいいません、ルームと称していました。各部のルームが南グラウンドの北の端にずっと並んでいました。その一番西の端が山岳部、その隣がボートつまり水上部のルームでした。当時山岳部は落第が名物で、水上部もまた落第が名物でした。毎年三月になりますと、山岳部と水上部の両方が、ルームから出て顔を合わせて、「お前のところは何人や」と言う。何人やというのは落第が何人やということです。ぼろぼろ落ちました。私も二年にわたって落第生の中に入る名誉を得たわけです。皆さん、当時は二年で落第したら「二年の表」「二年の裏」と言っただけでしょう。一年落

第すると表裏ですが、三年同じ学年やったら何と言いますか、大変困るのです。それで私が考えたのは松竹梅です。「二年の松」の年、「二年の竹」の年、「二年の梅」の年、そう言わないと区別がつかない。これは非常にいい点もありまして、私は同級生が普通の人の三倍いるのです。実に有難いことです。いまだに私はそれで随分助けられています。

「二年の梅」の年の一学期間はちょっと山行きを自粛しましたが、その夏からどんどん山行きをまた始めています。そうして三年に無事、無事も何も堂々と進級しました。

## 白頭山・樺太

白頭山と樺太は三高山岳部にとっても画期的なことだったと思うのですが、今西先生の白頭山のことと合わせてお話頂けませんか。

今西さんの白頭山というのは、私が京都一中の頃、一九三四年から五年にかけて行われた今西錦司さんを隊長とする京都帝国大学白頭山遠征隊です。これは京都大学学士山岳会の第一回遠征隊で、隊員のなかには今西隊長をはじめ、京都一中山岳部の先輩が四人いました。大規模の組織を持った遠征隊で、白頭山の冬季初登頂に成功して、四人の先輩達が母校に講演に來られました。これは私の生涯を決める大きなできごとでした。自分もこういう探検の道を進もうと決心したのです。

私が白頭山に行ったのは一九四〇年、三高三年生の夏休みです。これはそんな大部隊ではなくて三高生三人で行ったのです。夏ですから携帯テントなど極めて軽装備で、自分で持てるだけの荷物で行きました。朝鮮半島のずっと北の国境近くの港町羅津らしんから冠帽峰かんぼうほう連山を越えて豆満江源流とうまんがげんりゅうに出ます。豆満江源流から摩天嶺山脈を越えて、鴨緑江源流に出ました。鴨緑江源流をずっとつめて白頭山に東側から登頂したのです。白頭山の頂上付近は大きな火口湖になっています。それは陥没でできたカルデラ湖カルデラこで天池てんちといいました。ちょっと奇怪な、私は悪魔的と言っていたのですが、セピア色の垂直の岸壁に取囲まれた大火口湖です。

そこから北を眺めると、地平線まで大森林が連なっていました。私達はまっすぐ北に下りましたが、悪戦苦闘の連続で、六日目によく満州側の前線警備隊にたどりつきました。そこは第二松花江の源流に当ります。第二松花江の源流がどの川だということは、その当時確定できていなかったのです。陸軍で発行した地図には嘘が書いてありました。白頭山の天池の水が滝になって北へ落ちている。その水が二道白河にどうはくかという川になっています。そこを私は自分で歩いて、この川が第二松花江の源流だということを突止めたのです。これが第二松花江のまさに間違いなしに源流です。その時、全く予定にはなかったことです。が、満州国に出てしまったので、当時、満州国の首府であった新京まで行って、鉄道で帰

国しました。

三高生最後の冬は樺太に行きました。京大の探検地理学会に属する学生達が、嚴冬期の樺太のイヌぞり旅行を試みる計画があつて、それに三高から私が加わることを許されたのです。樺太は当時は日本領で、豊原（現在のユージノサハリンスク）は日本人が北方に作った実に壮麗な都市で、そこに樺太庁がありました。豊原から樺太の東側を通つて、単線の鉄道が延々と敷香（シムカ）までのびていました。そこが日本人の最後の町で、そこまで鉄道で行きました。敷香には沢山の原住民がいました。ギリヤークとオロツコです。現在ギリヤークはニブヒ、オロツコはウイルタとっています。かれらがイヌぞりを使っていました。

我々は何を考へておつたかといふと、もちろん南極へ行くことを考へていたのです。南極に挑戦したのは、当時はまだスコットのイギリス隊、アムンゼンのノルウェー隊、日本はもちろん白瀬隊しかなかった。日本人として南極をやろう、そのために必要なイヌぞりの研究をどうしてもやらなければいけない、というのでイヌぞりの試験に行ったのです。私はギリヤーク族とオロツコ族の人をイヌぞりと一緒に雇い入れて、その連中と一緒に樺太のツンドラ地帯を随分走りました。イヌぞりはがたがたの乗りもので、乗り心地の良いものではありません。タライカ湖のつるつとした氷の表面を走っているときは、割合輕快に走るのですが、幌内川（ボロナイ）の横断はひどいものです。というのは川というのは、氷

の上に水が何べんでも流れて来て、氷の山脈が幾つもできるのです。それを乗越えて行かねばならないので、幌内川の横断には往生しました。それでも、樺太東北山脈の森林をかなり奥まで入りました。

三高生活で思い出してもおぞましい、悪夢のようなのが軍事教練でした。最後に査閲というのがあって、それに通っていないと軍隊に入って甲種幹部候補生、つまり将校にならない。そうすると下士官でいなければならない。樺太でイヌぞりをやって帰ってきたのが一九四一年の一月末でした。帰ってみると、査閲はとくに済んでしまっていました。査閲を受けていない私はどうなりますか。ところがどういいうわけかわからないのですが、アウトだと思っていたらちゃんと合格しておったのです。

### 動物学者から民族学者へ

先生は京都大学理学部動物学科の入学試験の口頭試問で「ここを出ても食えないよ」と言われたそうですが、敢えてその道をお進みになりました。京大の修学期間は私共のときから半年繰上になりましたし、学徒出陣もございました。当時の研究生生活についてお話し下さいませんか。

私自身は理学部の学生でしたから学徒出陣はなかったのですが、三年の在学期間は短縮

されて、一九四三年の九月に繰り上げ卒業になりました、直ぐに大学院に進みました。

その前に徴兵検査を受け、第一乙種合格、現役兵でした。兵種は戦車兵で入隊先は加古川四九部隊、司馬遼太郎がいた同じあの戦車連隊です。彼は可哀想に戦地に引張り出されて随分苦勞したようです。私は一ぺんも戦車に乗らないうちに終戦になりました。

実はその年、大学院特別研究生という制度ができて、動物学教室で私が指名を受けたのです。特別研究生は二年間入営が延期されました。私は延期された二年間を大陸での仕事にあてたいと考えていました。その機会は意外に早くやって来たのです。

内モンゴルの張家口市ちようかこうに西北研究所という新しい研究所ができて、今西錦司先生が所長に就任されました。私はさっそく志願して付いて行き、大学院特別研究生の身分のまま、一九四四年から四六年まで二年間モンゴルで暮したのです。

張家口は、現在は中国の河北省に属しますが、戦時中は蒙古自治邦という半独立国家の首都でした。私は張家口を拠点にして、嚴冬期に現在の内蒙古自治区をウマとラクダで歩いているのです。その半年間、みっちりフィールドにいました。その間にモンゴル語を習得し、モンゴルの遊牧生活の子細に見て民族学を実地に勉強したのです。

実はこれも前後しますが、先程のご紹介にありましたように、私は大学は京都大学の理学部で動物学専攻です。学位は「動物数理社会学」でもらっているのです。後に文明論の

ようなことをやりだしましたので、てっきり文学部の出身だろうと思っておられる方が多いのです。ついこの間も、阪大の総長と話をしていましたら、ずっと文学部の人だろうと思っていたと言われました。「何をおっしゃいますか、理学部出身のれっきとした理学博士です」と威張ったのです。

なぜ動物学から文化人類学ないし文明論に転向したのかといいますが、モンゴルがきっかけなのです。始めはモンゴルの家畜の生態を調べるといふ名目でモンゴルに行ったのですが、実際行ってみると、家畜を見ているより、家畜を飼っているモンゴルの方がはるかに面白い。それで家畜の方はやめにして人間の方をやることにしました。モンゴル人の研究を始め、モンゴル民族の遊牧民の生活を調べたのです。二年間向こうにいまして、いちおうモンゴルの専門家のようになってしまったのです。

『狩猟と遊牧の世界』という著書がありますが、これは遊牧起源論を書いたものです。北方シベリアの森林から出て来た狩猟民が、モンゴル草原にいた家畜の群にそのままくっついて行っででき上ったのが、現在の遊牧だという説なのです。これまで、西欧の学者達は皆、獣を一匹ずつかまえて来て飼ひ慣らして、それをだんだん殖やしていつて群を作った。そうして家畜、畜群、遊牧ができたと考えていました。しかし、私は現地へ行っでそんな馬鹿なことは絶対あり得ないと思いました。家畜の群というのは始めから群なので

す。有蹄類の群というのは大きなものになりますと千頭を越えます。それが集団で動いているのです。そんなものを一匹ずつ捕まえてきて飼ひ慣らして大きなものにする。そんな回りくどいことをやる筈がない。動物は始めから群として草原にいたのですから、それに人間がくっついて行つたと考えればよい。くっついて歩くためにいろいろ工夫して、移動式の円いゲルというフェルトの天幕を作った。家畜について歩く人間というのが遊牧の起源だという説を出しているのです。

### カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊

先生は一九五七年に「文明の生態史観」を発表されています。このような地球的規模で文明を考察される契機となつたのは、「カラコラム・ヒンズークシ学術探検」だと思ひますので、その探検についてお話ししませんか。

一九五五年に京都大学からカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊が派遣され、私はそれに参加しました。これは戦後始めての本格的学術探検隊で、木原均総隊長が指揮するヒンズークシ隊と今西錦司支隊長が指揮するカラコラム隊にわかれていました。

私はヒンズークシ隊の人類学班に属し、西ヒンズークシ山中にいらしいという噂のモゴール族をさがしに行つたのです。その舞台は主としてアフガニスタンです。モゴールと

いうのはペルシャ語で、モンゴルのことです。モンゴルという言葉が西へ伝わってペルシャ語化したのです。ペルシャ語は向こうではファルシー、あるいは現在はダリー語と言っています。モゴル族は現在のモンゴル国や内蒙古にいる人達と同じ系統の民族です。それを探しに行つて、見つけたのです。ヒンズークシの深い山奥に、ごく少数ですがモンゴル族の分れがいたのです。

どうしてそんなところにモンゴル族がいるかということですが、それは一三世紀、モンゴル帝国が最も盛んであったときに、ペルシャ、今のイランにモンゴル人が王朝を築いていた。イルハーン国という国が今のペルシャにできていたのです。そしてその統治者、貴族がみんなモンゴル人であつた。イルハーン王朝の成立にともなつて、駐屯部隊として東の方のモンゴルから進駐して行つたモンゴル人達です。ところが、イルハーン帝国は一世紀もたないで崩壊しました。しかし、駐屯軍として付いて行つたモンゴル兵の大部分はそこに残つたのです。それが皆、近所の山の奥に逃込んで隠れて、その子孫がええんと今日まで続いている、そういう推定をしています。

それがどうして分つたかといいますと、フィンランドの言語学者のラムステットがトルクメニスタンのクシカの町で、なにかわけのわからん奇妙な言語をしゃべっている男たちがいるというので、それをつかまえて語彙の調査をしました。彼等二人の男はモゴルだ

と自称しており、その言語がモンゴル語の一方言であることがわかりました。このモゴール族がいるのも西ヒンズークシの山の中らしいというので、私たちはそれを調べに行こうということになり、さがしに行ったのです。

私達が行きましたのは、アフガニスタンのずっと北の方です。探検隊の連中は、みんなそれぞれ専門が違いますから、別れ別れになりました。最後は山崎忠君と私と二人だけでモゴール族の村を突き止めて、そこへ入って行ったのです。山崎君は天理大学の言語学の教授でモンゴル語が専門です。私達はゴラート地方の途中まで、けわしい山道をジープでたどりました。それはどんなひどい道であったか、よくも無事に行けたというような、そんなめちやくちやの道でした。その地点からあとはウマしか通れないのです。何日も何日も炎天下をウマで歩きまして、次第に情報を確かめて行きました。どうもこれらしい。遂に明らかにモゴールと自称する民族の村をつきとめました。そこで後に有名になったジルニー文書という文書を発見したのです。これは彼等が喋っているモゴール語と先程言いましたファルシーつまりペルシャ語との対訳の簡単なグロッサリーなのです。それはもちろん手書本です。それを発見し持ち帰りました。これは現在コロタイプ版で出ています。

モゴール族は実在していました。しかし、もう消滅寸前です。私が行ったときモゴール語を話すという人は数人しかいませんでした。でも、明らかに喋っています。私は戦争中

にモンゴルにしまして、その当時はモンゴル語が喋れたのです。モンゴル語であるかどうかは、聞いたら私には直ぐ分ります。それは明らかにモンゴル語でした。

言語調査ですから、もちろんテープに録音しました。但し、一九五〇年代には録音をどうするかは大問題でした。現在のような軽便な録音機はありません。大きくてもものすごく重い録音機をもって行きました。デンスケといいました。いちおう肩から掛けるようになっていきますけれど、あんなものを肩に掛けて歩けるものではありません。それを廻してテープに取っています。その当時、針金に録音する仕掛がドイツでできてまして、それも持つて行ったのです。これは役に立ちませんでした。デンスケは今のテープより性能はいいのですけれども、機械の重いことで往生したのです。電気はもちろん来ていませんから乾電池です。録音機と電池、電池はスペアが要りますから、相当の重量物をウマに積んで現場まで持って行きました。

このとき、日映新社という映画会社の撮影技師が付いて来まして、全記録をカラーフィルムにおさめています。それには私がテープに録音しているシーンも入っています。それは映画になりました。「カラコルム」という題で一般公開され、沢山の人が見ています。封切は一九五六年でした。私は今でもその一六ミリ判を保管しています。

## アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南アメリカ、そして大洋州

先生は全世界をお歩きになってご自身の考察を深めていらっしやいます。そのことについてお話頂きたいのですが。

その後、私は東南アジア諸国のエクスペディションをやっています。当時、私は大阪市大の助教授でしたが、その大阪市大でも京大のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊に刺激されて探検熱が高まりました。

たまたま一九五七年夏に、タイのバンコクで太平洋学術会議が開かれるので、それに参加するというかたちで、大阪市立大学東南アジア学術調査隊を組織しました。調査したのは東南アジアの四カ国、タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスです。東南アジアなら道路がある、そんなら自動車が使えらるので、三菱からジープを三台出してもらいました、それで廻ったのです。研究資材を全部ジープに積み込んで、いわば移動研究室にしたのです。この当時、自動車探検隊というのは極めて珍しかった。

隊員は生物学教室の六人でしたが、そのとき誰も運転免許証をもっていないませんでした。それで慌てて大阪の関目の自動車学校へ行きました。普通のコースをやっていたの間には間に合わないというので、速成であつという間に全員免許証を取得しました。但し日本では

乗らないで下さいよという約束でした。それで意気揚々と東南アジアへ出掛けたのです。

私達は日本自動車協会発行の国際免許証と自動車の通関証をもって各国の国境をすいすいと通って、最後にまたタイへ帰って来て、そこで車を船に積込んで日本まで持って帰ったのです。そして神戸税関を通ろうとしたら待ったがかかった。そんな国際的とりきめは無いと言うのです。私共の車は差止められた。私はちゃんと日本で通関証を取得して行っているのです。それは偽物だということで調べてみたら、まさに偽物だったのです。私達は自動車協会にまんまとだまされて偽物を買って行ったのです。ところが各国では通用したのです。けれど、日本の税関はまことに厳正なもので、それは通用しない、駄目だと言う。それでいろいろすったもんだの末、やっと堪忍してもらって上陸させてもらいました。

とにかく自動車で東南アジアを廻ったのですが、アスファルト道路というようなものはありません。聞くも涙、語るも涙のようなひどい道でした。特にベトナムからアンナン山脈を横断してラオスに入るところは、その後ベトナム戦争の戦場になったところで、道などありません。ジャングルのなかを自動車でゴリ押しで通ったのです。幸いメコンの流域はずっと岩盤が出ていて、岩盤の上なら案外楽に走れるのです。ところが、時々横から谷が入ってきて、その谷を渡るのが大変でした。いちおう橋らしい格好をしたものがかけてありますが、上に乗るとどしゃんと落ちるというすさまじいものでした。とにかく、どう

やら生きて帰って来れたというのが実感でした。

それからあと、私はアフリカに行っています。一九六一年頃から、京都大学ではアフリカで野生類人猿の研究を始めました。その後、研究対象はアフリカの狩猟・採集民や牧畜民にまでひろがり、私は人類班の一員として一九六三年七月から参加し、牧畜民の研究をやりました。研究対象はダトーガ族というウシ牧畜民で、その集団の中に入って暮らしました。そこにハツツアという狩猟民がいたのです。これはクリック・ランゲージを語る部族で、現在は近縁の部族がカラハリ砂漠にいます。

クリック・ランゲージとはどういう言語かといいますが、吸気音または舌うちで発音する音があるというめずらしい言葉です。現在、世界でクリック・ランゲージがあるのはこの部族だけです。その連中が、ごく少数ですがことカラハリ砂漠に狩猟民として住んでいます。ハツツア狩猟民は裸で、ダトーガ牧畜民も裸です。裸ですが大きな布一枚を、肩からかぶっているのです。男も女もそうです。ハツツアは小さい木の枝で組んだ鳥かごのような住居に住んでいます。世界で最も原始的な生活をしている部族です。

ハツツアは狩猟をどのようにしてやるかという弓と矢です。タンザニア国は野生動物の保護にうるさく、狩猟は原則的に禁止されていますが、ハツツアだけは放任です。あんな弓と矢でいくら獣を捕っても大したことはないというので放置しています。ハツツ

アの弓はものすごい強弓です。われわれがやっても弦はぴりっとも動きません。これで狩猟をしているのですが、狩猟といっても捕れるのはせいぜい小型のカモシカくらいで、大したものには捕れません。付近には猛獣のライオンはかなりいますし、サイやカバもいます。そういう野獣がいっぱいいるのですが、それは原始的な狩猟民の彼等ではとても相手にはできないのです。

我々はちゃんとタンザニアで免許を取って狩猟のための銃を持っていました。だからいくら野獣を捕れるのです。我々の仲間の一人が、その本式の猟銃でカバを一頭倒しました。そしてその肉は、ハツツアの連中に、全部食べてもよろしいということにしたのです。そうすると何十人かのハツツアが集って来て、そこへ座り込んで三日三晩その肉を食っていました。彼等にはとても捕れない巨大な獣です。一ぺんそういうチャンスにぶつかりますと、一か月分くらい食いだめをするのです。

私はそこで翌年の三月まで殆ど九カ月いました。

一九六五年の春、京大の人文科学研究所の助教授に就任し、その後、今西教授のあとをうけて、教授に昇進しました。私は理科から文科へ決定的に転向したのです。そこで「ヨーロッパ基層文化の研究」という題目で、文部省の海外学術調査費を申請しました。

ヨーロッパ調査隊は一九六七年、六九年、七二年の三次にわたって行われ、私は第一次

と第二次に参加しました。第一次はスペインのバスク地方に住み込んで、ピレネーのヒツジ牧畜民の実態を見ました。第二次のときは中部イタリアの山村で、やはりヒツジ牧畜民の実態を見ました。結局、私は牧畜屋です。

しかし、その間に、牧畜研究のほかに世界各国を随分歩きました。南米はブラジル、ペルー、パラグアイに行っています。オーストラリア大陸は二度廻っており、一度は真ん中を横断しました。ニュージーランドは北島も南島も歩きました。

話は前後しますが、一九四一年、私達が京大に入学すると、学術探検隊員としての訓練を受けることになり、ミクロネシアが選ばれました。その夏にパラオ、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルートとまわり、最後にポナペ島に一夏いました。ポナペ島は現在はポンペイといっています。ポナペ島の島民は、当時はカナカ族と呼んでいましたが、その人達の村に入ったのです。ついでに申上げますが、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国は一九八六年に、パラオ共和国は一九九四年に独立しました。ミクロネシア連邦の初代大統領はナカヤマさん、パラオ共和国の初代大統領はナカムラさんです。どちらも日系人、つまり日本人が行って、向うで家庭を持ってきた子供です。だから日系大統領はペルーのフジモリさんが最初ではない。あの人は三人目です。既に二人いるのです。ミクロネシア連

邦のナカヤマさんの弟さんが日本に大使になって来ておられ、私のところへも来られました。ミクロネシア連邦が独立したとき、或はパラオ共和国が独立したときに、向うの人がみんな信じて疑わなかったのは、先ず第一に日本が大使館を作ってくれるだろうということでした。ところが、日本政府はどういうわけですか、一種の大国主義だと思うのですが、臨時代理大使を置いたのは、ミクロネシア連邦が九五年、マーシャル諸島共和国が九七年、パラオ共和国は九九年です。これらの島々はかつて日本の委任統治領で、実に日本と仲が良かった。島民は全員日本語が話せます。その人達を日本は見捨てたのです。最近、やつと外交ルートができつつあるようです。

## ツングース水軍説

先生は一九五七年に「文明の生態史観」を発表されました。その後の日本文明についてのお考えを伺いたいのですが。

私は『中央公論』の二〇〇〇年一月号に、日本国家の源流についての考えを発表する予定をしていますので、その予告編ということでお話しします。

現在、狩猟民は世界中で非常に少なくなりました。アイヌはもともと狩猟民であったのですが、今日、日本国内に狩猟民はいません。私は狩猟民というものを現地で本当に知

っているのです。それは一九四二年、大学二年のとき、今西先生を隊長にして殆ど学生ばかりの探検隊で北部大興安嶺（たいやんれい）を歩いたのです。私が狩猟民と最初に接触したのはこのときです。トナカイを連れて森林の中を歩いている一群の人達がいる。ツングースの一派でトナカイ遊牧民の一つです。今日ではエベンキという名になっています。みんな銃を持っています、テンなどの動物を撃って毛皮をとるのです。

皆さんはモンゴルのことはよくご存じですが、ツングースのことはあまりご存じない。

ツングース民族の一番大きな集団は満州族です。満州族は南方ツングースです。今言いましたエベンキは北方ツングースで大興安嶺にいます。南方ツングースは今の東満山地及び遼河流域（りょうよくが）、鴨緑江流域（おうりょくが）に拡がって、東南満州は全部満州族の土地でした。

「騎馬民族説」という有名な学説があります。これは江上波夫先生という大考古学者、

私は若いときからよく知っている先生ですが、この先生が戦後言い出された学説で、日本国家を建国したのは騎馬民族だという考えです。ウマに乗った民族が朝鮮半島を南下して、そして日本列島に侵入してきた。江上先生は大胆な推理をしています、日本に侵入してきた征服王朝の最初の王は、崇神天皇（すじん）だということです。崇神天皇は人皇第一〇代です。歴史的文献をいろいろ使って、これだということまで追いつめておられるのです。日本国家の起源を騎馬民族による征服とみるのは実に卓抜な説です。

しかし私は生態学者、あるいはモンゴル遊牧民を研究した人間として賛成しかねると思つています。遊牧民であるならば、日本にはどうして家畜の去勢が無いのか、去勢技術を持つていない遊牧民はありえないのです。雄を去勢することにより群のコントロールができるようになって、はじめて遊牧というものが成立する。もう一つ、日本に搾乳、つまり乳搾りがない。日本ではいまだに牛乳をあまり重要な食料とは考えていない。雄を去勢する、雌から乳を搾る、これが遊牧の技術的な原理です。そのどちらもない。そんな遊牧民はありえないのです。だから私は遊牧民である騎馬民族が日本に侵入して来たという説には同調しがたい。

ただし遊牧民の影響を非常に受けたある民族が入って来たことは考えられる。遊牧民の影響を非常に受けたということは江波さんも考えておられたと思います。それは軍事組織です。古代日本の軍事組織はモンゴルなんかと大体同じです。それを考えるとありえないことではない。私の説はツングース説ですが、ただしツングースがウマに乗ってやって来た、家畜を引連れてやって来たとは考えていないのです。

私は彼等が船で来たというふうに想定しています。場所は何処かというと満州の遼河流域及び鴨緑江流域です。もう一つ、この頃少し考え方をかえているのは、豆満江流域、東満州です、この三つの大河、それから黒竜江、つまりアムール川の上流、こゝらで船をあ

やつる技術を十分に習熟した民族がいた。それが海へ乗出して来た。最近、ここで私の考えがちよつとゆれているのですが、今までは鴨緑江及び遼河を下って、朝鮮半島の西側を伝って南下してきて、南朝鮮の百済を跳躍台にして日本列島、九州へ入って来たと考えていたのですが、どうも、それとは違うかもしれない。

というのは、豆満江を下れば今の北朝鮮とシベリアとの接点に出るのです。そこからまっすぐ南へ下って来たら、日本列島に必ずぶち当たる、これかもしれない。だから朝鮮半島の西側説と東側説の両方が成立つと思うのですが、要するに船に乗って来たのです。これを私は「ツングース水軍説」と名付けているのです。騎馬民族ではありません。ただしこれは軍事集団ですから、もちろんウマを連れていきます。

この説にはかなりはつきりした証拠があるのです。考古学者は何にも言わないのですが、日向の国、宮崎県ですが、あそこに西都原<sup>さいとばる</sup>大古墳群があります。原っぱのことを九州では「ばる」と言います。西都原の古墳群が発掘されまして、その中から舟形埴輪が出土しています。その船には両側の舷側に六つずつの櫓<sup>ち</sup>ベソが並んでいます。何丁櫓か知らないが大きな櫓で、外洋船です。

そこで私が今考えあぐねているのは、日本列島の何処へ上陸したかです。これは普通西側で考えますと、今の長崎県あたりに当るわけですが、どうもちよつといろいろ合わない

点があるのです。古代九州は筑紫の君という筑紫王朝の支配下にありますから、これが後の太宰府です。筑紫の君というのは大分経ってから、何世紀ですか、岩井の反乱がありまして、岩井の大君というのを大和朝廷が征伐に行つて滅ぼしたのです。それが九州王朝の最後なのです。ツングース水軍がそれと戦つて上陸したというのは考えにくいのです。

私はさっきの朝鮮の東側を通り関門海峡、豊後水道をぬけて、日向へ上陸したと考えています。北九州には太宰府の勢力が確立していて、そこには上陸できなかったのでしょうか。神武天皇の東征軍の拠点は日向です。これは間違いない。日向から豊後水道を通つて瀬戸内へ入つて行く。そうすると古代史の日本の舞台は筑紫ではなくて日向だと、最近はこの考えています。

これは何か心がわくわくするような話で、面白いなと思つています。私は歴史家ではありませんから、古代史における歴史的文書から推定したわけではありませんが、これは民族学者の直観のようなものです。もう少し先を言います。神武天皇は何世紀の人でしたか教えて下さいとお願ひしても歴史家は答えてくれません。もちろん文書が無かったら歴史になりませんから、彼らは何も言いません。それは何世紀ですか。日本王朝、日本国家の起源は意外に新しいように思います。神武東征神話がなぜ水軍であつたのか。ツングース水軍説はこの疑問にはつきり答えているのです。彼らははじめから水軍だつたのです。

八世紀初頭になると驚くべき事実が出てきます。七二七年の渤海国使節団の来朝です。

渤海国というのは高句麗国家滅亡のあとをうけて北朝鮮にいた高句麗王朝の連中が満州東部に作った国で、建国は六九八年です。その住民たちはまぎれもなく満州族、つまりツングースです。渤海国の日本海貿易の中心は少し西の方ですが、東京<sup>とうけい</sup>というところで、豆満江上流です。そこが東の窓口です。

八世紀の始めに来た最初の渤海使節団は堂々たる使節団です。何艘かの船に乗って日本海を突ききってやって来た。たぶん船出する場所は豆満江の河口、今の朝鮮半島の付け根の清津<sup>せいしん</sup>のあたりでしょう。最初は潮流に流されて出羽の国へ漂着している。そこで向こうから来た二四人のうち一六人が、蝦夷に襲撃されて殺されたということです。残った人が能登あたりから奈良の都へ入りました。こうして渤海国と日本との国交が始る。その後、八世紀から一〇世紀の始め、つまり奈良朝の始めから平安朝の前期にかけて二〇〇年ほどの間に三十数回来ています。その間に、こちらからも答礼の使節団が行っています。

とにかく渤海と日本との間にははっきりした国交がありました。これはなぜかと言いますと、中間に新羅がいます。朝鮮半島の南東部です。この新羅が日本と渤海の共通の敵なのです。新羅を挟み撃ちにするための日本と渤海との同盟軍、結局それはできなかったのですが、それを作るのが目的だったのです。数年に一度、渤海の使節団が来る。大体は石

見から出羽にかけての日本海側のどこかに漂着した。そこで船がこわれてどうにもならなくなつた連中もいました。場合によっては日本で船を建造して、それに使節団を乗せて送り返したりもしています。

渤海国は日本と同じ唐の律令制をそっくりそのまま導入した文明国です。但し、狩猟民ですから、稲作はもちろんありません。畑作狩猟民です。それが現在の満州の東南部全部を領域とした大きな国でした。当時の随、唐の文化を全面的に取入れていますから漢文がよくできる、漢詩もよくできる。日本に來た使節団と日本側の宮廷貴族との間では漢詩のやりとりをしています。例えば日本側の接待のトップが菅原道真であつた時もあります。お互いの教養の比べ合いのようなことをやっていたようです。なかには日本側から返礼使節団として舞姫を一人でしたか送つたという記録が残っています。そのお嬢さん達どうなつたのでしょうか。渤海使節団と一緒に向うへ渡っているのです。

とにかく行き来が随分続いています。ツングース水軍の渡来は渤海使節団の先発部隊であつたと考えられます。

ほぼ二〇〇年間続いた国交は、渤海国自身の崩壊によつて終わりを迎えます。それがなぜ壊滅したかという、直ぐ西側の契丹に滅ばされたのです。九二六年です。契丹というのはモンゴル族です。モンゴル族にやられて、渤海国が壊滅する。

ところがその壊滅する前に興味ぶかい話があるのです。一〇世紀半ば頃白頭山の大噴火という事件が起った。灰がずつと流れて原始的な農耕を営んでいた渤海国の生産基盤が全部やられた。それで非常に弱ってしまった。そこへ契丹からの攻撃を受けてあえなく崩壊したというふうに考えられるかもしれません。白頭山大噴火の痕跡は、日本の東北地方にも出てきます。地層の或る部分に白頭山の灰が層になったところがありますから、日本海を渡って大噴火の灰が流れて来ている。

渤海国滅亡後、ツングースと日本との直接的交渉はとだえたままになります。ツングース水軍説の話はここで終わります。

## 失明後の知的生産

雑誌『日経ビジネス』の一九九九年八月二日・九日合併号に梅棹先生のお話が出ていました。そこで失明後のお仕事は、出版社と執筆の約束をしながら原稿ができないままになっていた本——「筆債」の履行と書かれています。常人では考えられない困難な仕事をどのようにしてこなしておられるのか、お話し下さいませんか。

私は一九九三年三月末、国立民族学博物館長を任期満了で退官しました。退官後は博物

館の名誉教授となり、またその顧問となりました。そして、館の一隅に部屋を使わせて頂いており、その部屋の壁面に私の著作物が並べられています。

私の一番早い著作は一九三四年です。そのとき京都一中山岳部にいまして、当時「山城三十山」というものが行われていました。これは先輩達が設定した山のリストで、これを全部登るというのが山岳部員の目標だったのです。その登山案内書を作ることになり、『山城三十山記 上篇』の編集者は一級上の大橋秀一郎でした。彼は四修で大阪商大へ進み、いなくなったので私が後を引受けまして、その翌年に『山城三十山記 下篇』を作りました。本を出したのです。これが私の最初の著作物です。一四才でした。これ以来、段々ともを書くようになりまして、六十何年にわたって文筆活動が続けることになったのです。

部屋の壁面を埋めている私の著作ですが、ちゃんとした大きな本もあれば、新聞記事一枚のものもあります。形式はいろいろですが、著作目録の項目数にして五千点位かと思えます。私は二〇〇〇年六月で八〇才になります。八〇才になったら記念に、あらためて著作目録を出版したいと思っていますが、その時には何点になっていきますかわかりません。そういうときに、どこで線を引いたらよろしいでしょうか。八〇才記念著作目録というのがよろしいかどうか、それから後にも著作は出ると思うのです。多分死んでも出

るのではないかと思います。

死んでからも出版される例は沢山あります。司馬遼太郎は私の親友でしたが、一九九六年に亡くなってからも、まだどんどん出ています。著作が多い人はそのようになるのです。色々なものを後で編集して、また一冊本ができるというわけです。私は来年位に一ぺん仕切をして著作目録を出してみようかと思っています。

実は一九七九年に著作目録を一度出しているのです。その時に既に三千項目はあったかと思っています。それから後も書き続けていますから、現在では項目数は倍ほどになっているでしょう。

さきほどご紹介いただきましたように、私は八六年に失明しましたが全盲ではありません。明暗は分かりますが、ものの形を見ることはできません。人の顔はもちろん、文字も一切分かりません。テレビは駄目、新聞も雑誌も駄目です。現在、情報はもっぱらラジオです。ラジオもはつきり言いまして、民間放送の饒舌と喧噪には堪えられません。NHKの第一放送に限って聞いています。いちおうそれだけ聞いておれば、世界の動きのあらましは分るのです。

しかしこれはインプットの方の話で、インプットは極めて難しいのですが、アウトプットは意外にできるのです。ここに盲人の方はおられないと思いますが、盲人の述懐として

お聞き下さい。アウトプットはどうしてやるかという点、私は口述するのです。しかしいわゆる口述筆記ではありません。筆記してたら間に合いません。秘書が全部ワープロに打ち込むのです。口述筆記ではなくて口述ワープロ打ちなのです。それで完全な原稿ができません。だから著述は少しも困らない。文章の手なおしも簡単です。ただ問題は家へ帰ってから、夜なべ仕事ができないことです。以前は、原稿は大抵夜に書いていたのです。それで明くる日の朝はゆっくり寝て、お昼頃に出て行って原稿を渡せばよかった。それがうちの仕事ができなくなりましたので、今は昼間出勤して、そこで口述ワープロ打ちで原稿を作っています。

書いたものの整理はできません。その点は、私は幸いなことに中学校、そして三高の頃からものごとの整理は割にきちんとできている方で、自分の書いたものも、今言いましたようにほぼ全部残っています。そういうことで割に整理がいいので助かっています。

蔵書は大変です。皆さんもご経験かと思いますが、今日蔵書の多い人なら本代は問題ではない。本を置く場所代が問題なのです。底面積、地価です、地面の値段が本の価格よりずっと高いのです。

だから何万冊か蔵書を抱えたら大変なことになります。私は早くにあきらめました。実は京都の北白川に家があるのですが、私は今は大阪府の千里に住んでいます。北白川の家

はそのまま置いてあります。北白川の家蔵書を全部置いていたのですが、そのときは家中本だらけになってどうにもしようがない。庭の周りに廊下を作りまして、その廊下の壁面両面とも全部本棚にしました。

何れにしても、こんなことをやっていたら大変だということで、博物館の館長に就任したときに、思い切って蔵書を国有財産にしました。国に寄付したのです。そうすると専門の図書係の人が付いて、きちんと国で管理保管してくれます。私はその館の中にいるのですから、蔵書は何時でも自分のもののように使えるのです。それで解決しました。今では私は家には殆ど本を持っていません。博物館にでなければ私の何万冊かあった蔵書が全部図書室にあって何時でも取出せます。非常にうまい方法を考えたものだと思っています。これは、はっきり言いまして公私混同です。公私混同でも普通の意味と反対です。つまり、私を公にしたのです。私のものを公にすることによって救われたのです。盲人なのに今でも本をどんどん買っています。また著者や出版社から頂きます。それを博物館の図書室に寄付し続けているのです。

先生のご業績は広範多岐にわたってしまして、このような席で全部をお話頂くことは到底不可能です。しかし、「三高と私」ということで、先生のご業績の基幹の部分

のお話を伺うことができたと思います。一番お好きな探検の話も出ました。これで終りたいと思います。大変お疲れになったことでございましょう。有難うございました。

### 【校正時追記】

本稿の冒頭にしるされているように、これは一九九九年九月一日に三高会館においておこなった講演をまとめたものである。講演に際しては、井垣隆敏氏に聞き役になつてもらい、たいへんお世話になつた。

また、このたび本稿を印刷に付するにあたつて、本書の編集にあたられた諸氏には細部にわたつて整理、訂正の手をわずらわせた。しるして、ここに謝意を表する。

本稿の末尾に今後の計画として、著作目録の新版をつくりたいということをのべたが、二〇〇一年の一二月末日にはまだ実現していない。この計画は二〇〇二年以後にもちこすことになった。

(国立民族学博物館顧問)